

明大南争総括・クラ解委解体宣言

政経学部 一五南争委員会

五ヶ月前、我々はスト権を圧迫的多数で確立し、ハリケードをもつて今日まで諸々の南争を雇用して来た。しかし、大憲法適用の恫喝に恐怖した大憲法当局はロッキンアウト、人口検問等々を行うことにより、自分の手で大憲法を更憲化するといふ。あまりに破廉恥な茶番を演じた。

今日、我々の見るものは、恥も外直もなぐり捨てて、無二旧秩序を守ろうとする当局の姿であり、かつての左翼的理論あるボーズも単に権力者の現出に過ぎなかつたといふことを自ら暴露した。被殺したの罪を

かかし今、我々が明確に自己批判的に総括しなればならぬ。これは力量的問題であるとはりえ、当局にあつたような状況を許し、こゝに現存的に明治大は静寂の内にあり、だが明治大が旧来の日常性をその内に取り戻すことはなげであらう。

五月有るの南争が日常性、秩序、意識構造に与えた亀裂は即自的知覚関係による糊塗などで誤魔化せ得るものではない。今後明大南争の局面がどのように移り変わって行くとも我々は、南争以降新たに切り開かれた地平に立ちあはゆる対応を見てゆくであらう。

元々、明大南争は東大、日大南争の切り開いた地平に立った闘りであり、単に外に起つた外的契機のみを南争の必然性として見るのではなく、入学の因大憲法自体のあり方に対する

治大として存在しつづける限り、我々は南争を続けなければならない。 ※クラス南争に關する問題点※

は見出し得ぬと考へ、クラス南争の破算の根源を考察してみることとした。

※クラス南争の破算※
われわれはバリケード突入以来緊密な共同性へ改善的健全な態度をとりあげて来たのではあるまいか？
そして運動が実態化されるとその裏にも、総体の中に逃げこみ闘争を何から外在的団体的行動（ゲバルト、デモンストレーション、バリケード）等々としてやらせ、自ら参加するといふ表層的結合しかできなかったか？

※新たなる前進のために！※
われわれが南争を闘つて来た者は諸々の地点から闘いの中に入つた。
—ある者は理性的判断の帰結から—
—ある者は感情的な認識から—
—ある者は小規模の局面を以て、源流、場

—ある者は、闘いのアロセスかどうであれ、今後さらに前進するためには自己の存在を歴史のダイナミズムの中に正しく位置づけ、新たなる地平を求め闘つて行くことである。

我々の特権は
知性と情熱であり
現在の南争に閉ざされた囚人であつてはならない